

学校経営のポイント

教職人生の生き様としての“贈る言葉”

若井 彌一

卒業式の時期を迎えている。3月に入ると、卒業式のラッシュとなる。管理職としても、また学級担任としても、卒業式の際にどんな内容の言葉で巣立ちゆく児童・生徒らに励ましをするか、思案するところであろう。

活用できる図書類は豊富にあるが

卒業していく子どもたちへの祝辞であったり、来賓としての挨拶であったり、子どもたちはいくつもの「お話」を聴くのであるが、ふり返ってみて、後々まで心に残って支えとなる言葉は、どれくらいあるものであろうか。

「後々まで心に残って支えとなる言葉」といえば、歴史上の人物の言葉とか、何の分野であれ現今の「時の人」や「話題の人物」の言葉を思い浮かべることが多いかもしれない。

歴史上の人物の名言集の類は、多数の図書（単行本）として出版されている。たとえば単行本としては、時代の閉塞状況も影響してか、白取春彦『超訳ニーチェの言葉』が多数の読者を得て、話題の図書となっている。ご存知の方が多からう。

また、毎年をふり返っての編集著作物として好評を博している『現代用語の基礎知識』（自由国民社）、『知恵蔵』（朝日新聞社）もある。

上述のように、これまでの先人の知恵を活用（援用）して、これを餞（はなむけ）の言葉とすることもよい。しかし、管理職として、あるいは学級担任として、自分の思いや期待を詩歌の形式によって「贈る言葉」とする試みも貴重である。

1冊の紹介をしておきたい。太田空賢著『歌集 この子らの瞳に Student's Apples』という102頁の本が発行されている。著者の教職人生を、短歌と

して時々表現してきたものをまとめたものである。解説なしで、いくつかを掲げてみる。

(1)「すれちがふ廊下でポンと肩たたく クラスがへにて別れし生徒」(2)「入院し修学旅行に來れぬ子に みやげ買はむとデパートを歩く」(3)「災害で他人の家に避難して 遠慮がちな生徒を見舞へり」(4)「採点の赤ペン置いて考へぬ 誤答とするには惜しき答へに」(5)「生前の君が好みしこの歌を 全校の友歌ひ涙す」(6)「壊さるる木造校舎に語りかく 生徒の詩あり繰返し読む」(7)「叱られしこと殊更に懐かしと 教へ子の声受話器に弾む」

一教師として、どんな気持ちで子どもたちと接していたか、やや大げさに言えば、教師としての生き様が鮮やかに読者にも伝わってくる。

この『歌集』には、対訳の英詩も掲げられており、これもまた長年の努力が窺われる点である。教育に対する真摯な姿勢が、歌詞の随所に表現されている（問い合わせ先＝たかだ越書林 025-524-5531）。

自作詩歌のプレゼントを試みる工夫

このような工夫のある教職生活を送っておられる方々も少なくないと思われる。短歌だけに限らず、俳句でも川柳でも、さらには都々逸表現であってもよい。

人々（教え子たち）の記憶に残りやすいという点では、論文としての叙述形式よりも、詩歌形式のものが優れていると思われる。そして、ふだんの取り組み作品のなかから、卒業式にふさわしいものをプレゼントできれば最高である。

誰でもができる、ささやかな試みの勧めである。

（わかい・やいち＝上越教育大学長）

●2月18日発売！ 歴史上の名言、箴言、一流スポーツ選手の言葉などから構成した講話実例集！

名言で語る校長講話—心をたがやす「言葉の話」

【編集】小島 宏（財団法人教育調査研究所研究部長）

A5判 228頁／定価 2310円

研修誌・図書の小社への直接注文は、無料FAX 0120-462-488をご利用ください（24時間受付・即日発送）